

刊行にあたって

立命館大学国際平和ミュージアム 加國尚志
平和教育研究センター副センター長

2017年は立命館大学国際平和ミュージアム開設25周年にあたる年でした。1992年の開設以来、戦争の記憶を継承し、日本軍による加害の過去と誠実に向き合うことを基本理念として、博物館展示を通じての平和教育を行ってきました。

第二次世界大戦終結後72年が過ぎ、直接的な戦争経験者が減少していく中で、いかにして戦争経験の記憶を継承していくのかということは、現在の平和博物館が直面している大きな問題です。現在、国際平和ミュージアム平和教育研究センターでは、「平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築」と「博物館の資料研究」という2つのプロジェクトで、収蔵資料の調査を進めるとともに、戦争体験の記憶継承のための展示技法についての研究を進めています。モノとしての資料とことばとしての証言を通じて、個人的記憶の継承を社会的記憶へと接続することを可能にする、物語性のある展示をどのようにして構築するのかという課題は、今後も国際平和ミュージアムにおいて探求すべきテーマです。

本19号では、「記憶の継承」を主題とする論文を中心に構成しています。

巻頭論文として渡邊英徳氏による「「記憶の解凍」資料の“フロー”化とコミュニケーションの創発による記憶の継承」を掲載しました。デジタル・アーカイブにおける情報の「フロー」化により、いかにして記憶の継承を行っていくのか。現代のテクノロジーと歴史的資料の関係についての考察が行われています。

また「調査・研究・実践報告」として、国際平和ミュージアム収蔵資料の調査研究・資料紹介や京都西陣空襲体験者の聞き取り調査などを収めています。これらの研究も、記憶の継承のための地道ではあるけれども重要な努力とと言えます。丸山彩氏・織田康孝氏の「〈八重潮〉の成立と展開—日本軍政下のジャワにおける公募歌曲」と番匠健一氏の「「西脇家資料」(西脇安吉、西脇りか、西脇安家族関係資料)について」は、前述した「博物館の資料研究」プロジェクトの研究会で発表されたものです。このように、平和教育研究センターでは資料研究が蓄積されてきています。

さらに実践報告として兼清順子氏による「人類の負の遺産を展示する博物館—ロンドンにある2つのホロコースト展示」では、ロンドンユダヤ人博物館(The Jewish Museum)と帝国戦争博物館(Imperial War Museum)でのホロコースト展示についての報告がなされています。また、糸井登氏「立命館小学校の平和教育」ではこれまでの平和教育実践の取り組みが紹介されています。

最後に、今年度をもって、モンテ・カセム国際平和ミュージアム館長が館長職を退かれることとなりました。2012年度より、館長として、学内外の多くの業務をこなされると同時に、国際平和ミュージアムの理念と理想を強く堅持することを訴えてこられました。その基本には、スリランカでの内戦の経験と平和への強い願いがあったからだと思います。私たちはこれからもカセム館長の平和への思いを引き継いで、平和研究・平和教育に尽力していかねばなりません。